

。ときめきリーフノベル

# おなご先生

文・高安義郎 絵・芝章一



原山玄治は小学校の先生になった。きっかけは一人のおなご先生だった。

おなご先生と会ったのは玄治が小学校五年生の時だった。玄治は終戦直後父を亡くし、老いた祖母の住む母の実家である漁村に越してきた。母親は近くにあった干物の加工所で働いた。

玄治は村の小学校に通うようになったが、なかなか仲間ができなかった。中学生と間違えられるほど背だけは高かったが色白でいかにもひ弱そうに見え『青びょうたん』のあだ名をつけられた。村の子供達は日焼けした赤黒い顔で、どこぞの原住民のようだった。そんな中に加工所のせがれで泰三という六年生のボスがおおり、泰三を中心にした数人の悪ガキ達がいた。

そのボスがある時、  
「おめっちの母ちゃん、俺んちの所では働いてんだろ。だからおめえは俺の子分になれ」

そんな事を言って近づいてきたのだ。玄治は、泰三に逆らえば母親が働けなくなるのではと思った。とはいえ、自分になりすまとも言わなかった。だがそれからというもの泰三はことある度に自分を使って玄治を呼びだした。

泰三達との遊びは楽しいこともあった。夏には一日中海で泳ぎ、貝を採ったり大きな網で魚を捕ったりした。玄治はいつの間にか泳ぎが達者になった。海中に一分以上も潜れるようになった。だが停留している漁船の下をくぐるのは恐ろしかった。大人達からは、『船の下をくぐっちゃいけない』とよく言われたが、なぜいけないのか玄治には分からなかった。

泰三達と遊ぶ中でいやなことがあった。泰三達は遊び疲れ、腹が減ると近くの畑に入り込み、トマトやマクワウリ、時にはスイカなどを盗みに行くのだ。盗みが嫌で玄治はこっそり家に帰

るのだが、いつであったか海から上がり、休んでいると漁船の下をくぐれなかったからスイカを盗ってこいと命令された。盗んだ事に罪悪感を感じながらも、スイカは火照った体にはこの上ない甘露だった。

玄治の最も嫌だったのは、時には中学生が数人加わり、雑貨店や駄菓子屋から万引きをすることだった。それだけは絶対にやるまいと思いい、中学生が来るとこっそり輪から抜け出て隠れた。ところがある時玄治がいなくなったことに気づいた中学生は、泰三に玄治を探させたのだ。渋々やってきた玄治に中学生は盗んだ駄菓子の幾つかを無理矢理におしつけてきた。玄治は震えながらチュウインガムを手にした。その時だった。怪しんで付けてきた店のおばさんに見つかったのだ。中学生達は一目散に逃げ去った。玄治はおばさんに襟首を押さえられ、学校に連れてこられた。手にはチュウインガムが握られていた。

「この前盗んだのも背が大きかったから、この子だったんだよ。警察につきだした方がいいんだけど」  
おばさんは玄治を教頭に引き渡すと帰って行った。

「おまえ万引きしたんか。おとなしそうな顔をして意外に悪だなあ。この前学校裏の畑のじいさんが押し込んで

て、スイカやトマトをしょっちゅう盗んで行く子がいると言っていたが、それもお前だろ」

教頭は恐ろしい顔で玄治をにらんだ。確かにたった一度だけスイカを盗ったことがある。だが何度もやっているのは泰三達だ。とはいえ『それは泰三が』とは言えなかった。母親が加工所を辞めさせられかねないからだ。黙っていると教頭の鉄拳が飛んできた。玄治は地面に倒れ込んだ。頬が腫れ上がったが涙は出なかった。

「強情な奴だ。今日はこれで勘弁するが、今度やったら少年院だぞ」  
教頭はいなくなった。そこへ駆け込んできた人がいた。担任のおなご先生だった。おなご先生は玄治を抱きしめながら言った。

「玄ちゃんはその子じゃないって知ってるもん。でももうあんな仲間と遊ぶのはやめよ。今度誘われたら先生に呼ばれてるからって言って私の所においで」  
先生の胸もとからは甘い香りが漂った。玄治は先生の胸の中で声を上げて泣いた。  
「俺、おなご先生のような先生になろう」  
教師をめざしたのは、まさにこの時であった。